

---

# やる気ない魔法科生徒

理九

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やる気ない魔法科生徒

### 【Nコード】

N4592J

### 【作者名】

理九

### 【あらすじ】

大気にマナというエネルギーが確認され、魔法学園が建てられた。才能があるということで学校に通うことになった桜坂夜季。だが、やる気のない彼は常に屋上にてサボっていた。そんな彼のもとに現われる一人の少女。その少女はとんでもないお人であった。やる気のない主人公が活躍するやる気のない物語。

前回と設定を変えました。

## 少女と少年（前書き）

執筆は初めてのため、文章に齟齬、意味不明な点が多いと思います。ですが、読者が快適に読めるように努力しようと思えます。もし、アドバイスがありましたらよろしく願います。

## 少女と少年

「あゝ、だるい」

屋上の日差しを浴びながら眩く。

「太陽つて眩しすぎじゃねえ？もう少し、大人しくしてくれれば快適なのに」

無意味なことを考えてしまう。

きんこーん、かんこーん

チャイムが鳴る。

授業が終わったのであろう。ということは、昼休みとなったはず。

「飯食う気もしないね」

「じゃあ、私が食べてあげる」

そんな声と、ガサガサと俺の脇に置いてあった袋が音をたてる。見ると、知らない少女が漁っていた。

「ああ、止めるも面倒」

昼飯は無くなってしまいが仕方ない、だって面倒だから。

少女を見ると、すでにアンパンを半分ほど食っていた。

それにしてもと思う。

小学生くらいにしか見えない。

それに制服を着ておらず、黒いドレスを身に纏っている。

うん、おかしい。

この学校は高校である。少し、おかしいけど高校である。

どう見ても幼女？が通えるわけではない。

でも、質問するのもカッターイのでやめておく。

「ねえ、喉渴いた」

「はい、これ」

寝転がりながら、懐に閉まってある水筒を手渡す。

「ん、ありがとう」

ごくごく喉が鳴る音が聞こえる。

豪快に飲んでいるのであろう。

「あつ、無くなった」

ちよつと！と怒りたくなつたが、面倒。目を閉じて気にしない。ごそごそつと聞こえ、隣に誰かが寝転がるのが気配で分かる。

「・・・ねえ、私が誰か気にならないの？」

少女が質問してくる。

「べつに」

興味はあつたが、それほどでもない。

「そう、私ユークつて言うの」

外国の人らしい。そういえば、肌も白かつたし、髪の毛も金髪だつたような。

というか、自己紹介された。

自己紹介されたから、俺もしておく。面倒だけど。

「はあ、俺は桜坂夜季。一年生」

「うん、夜季ね。覚えておく」

殊勝なもの言いであつた。

「・・・」

その後は特に会話もなく、眠りについてしまった。

日丸魔法学園。

大気にマナという未知のエネルギーが発見された。

人の意識と共有することで、現象を引き起こせる。それを魔法と呼んだ。

そんな便利なものが発見されたのだ。

だからか、世界で大変な動きが起きた。

マナと干渉できる人間は、子供ばかり。今の大人は少人数しか扱えていない。子供でも使える人と使えない人がいる。

人によって干渉力が違い、レーザーとか放てる人間とかいるらしい。近代兵器にも負けない力ということで、人材を育てようと学校を作つた。

日本も例外ではなく、早々と作ったのが日丸魔法学園である。集め方は、中学の子供を対象に木の板を手渡す。それが発光したら、才能有りらしい。

例外はなく、学校に入れられてしまう。

まあ、危険人物になりえるし、飼える範囲に置いておきたいのである。

そういうわけで、俺も無理やり入学させられた。

でも、授業は退屈だし、眠いし、だるいし、飽きた。というわけで、常に屋上で寝ているのが日課である。

雨の日はテント（持参）の中で過ごす。

先生に注意されるわけでもないので、快適な生活を送れている。でも、俺くらいである。

成績によって、政府からお小遣いが支給されるのだ。

高ければ高いし、低ければ安い。

俺なんか、一月に5千円である。

安すぎ！

高い人で100万とか噂されてたもん。

全寮制だし、縛りつけているんだから、もう少しくれても良いのではないだろうか。

そう思う学園一年生である。

常に寝ているためか、友人の一人もいない。まあ、寝れるからいいけど。

まあ、そんな感じである。

ちなみに、今いる場所は寮である。

古臭い建物。狭い4畳半。トイレと風呂は共同。一応最新のキッチンが存在している。電気系のコンロが普及している中、ガスという最新である。

それも、簡易コンロ。

まあ、料理はしないのでいいけど。

食事は少し離れたところに存在している。

ファミレスである。

代金はタダなので、生徒が常にいるというのが悩みである。  
人が多いところは苦手である。

コンコン

控えめなノックの音が聞こえる。

無視していると、

ドンドン

借金取りみたいな音に変わり、

「開けるや！」

怒号まで聞こえた。

「あゝ、開いてるよ」

この扉、鍵がぶつ壊れているのでかけれない。

扉が開き、進入してくる少女。

「こほん、夕飯を食べに行くわよ」

「えゝ、面倒だから、いいよ。いってらっしゃい」

「どんだけ！食べるのも面倒とか、あんたおかしいわよ」

いつもの会話である。同じ繰り返しなのに、彼女は飽きないなっと思っ。

このツイン少女はクラスメイトで、隣人の怒りっばい、・・・あれ？

「ねえ、名前なんだっけ？」

「このカスが！」

靴を履いたまま蹴られた。

「私は、天上奈美よ！何回目よ、この自己紹介！」

そんなに繰り返していたらしい。

ちなみに、てんじょうではなく、あまかみである。

「そうかあ、じゃあ奈美、おやすみ」

「寝るな！」

俺の頭を踏んづけてくる。

彼女は私服。それもスカートである。見上げてしまった俺には・・・  
見えた！

「白だ」

更に力を込められ、頭蓋骨が悲鳴をあげる。

「あんたって、何でそうなのかしら」

「ぐぎよおおおおおおおお」

さすがに痛かった。

何故か、引きずられるようにファミレスにやってきた。

そして、席に着き注文。

「私、ハンバーグ」

「俺は、このチョコパフェを二つで」

「何で、デザートなのよ!」

お気に召さなかったようである。

「だって、カロリー高いから、これだけ食べてれば生きれるんじゃない?」

「無理だから」

そうらしい。自分的には生きれそうだけど。

店員がニコニコと微笑みながら、目で早くしろと訴えてくる。

「ああ、これにする」

俺は指をさす。そこにはカルボナーラが写真で存在した。

「それでは繰り返しします。ハンバーグセットがお一つ。カルボナーラがお一つ。チョコパフェが二つ。以上でよろしいでしょうか?」

「うん、おっけえ」

「どこがよ!」

頭を殴られる。

「二つも食べれるわけ?」

「なんか断るのも、面倒だったし」

「はあ、チョコパフェは一つでお願いします」

了解しました。そう言って、店員さんは厨房に消える。

「チョコパフェも食べるんだあ。結構、食欲旺盛?」

「違います。あんたが食べるの」

「え、俺いいよ。そんなに食べれる気がしないし」

「じゃあ、頼むな！」

またしても、殴られた。

料理が届き、黙々と食べる。

食べているとき、彼女はあまり話さないのだ。

自分的には楽であるが・・・ぐう。

「食いながら、寝るな！」

殴られ、眼が覚める。

「ああ、ごめんねえ」

「はあ、あんたって何でそんなわけ？もっと、やる気でしたら？」

「うーん、もう少ししたら、出すと思っ」

「本当かよ」

信じてはくれなかった。

「ねえ、そういえば、何で俺なんかにまつわけ？」

すぐく、気になっていた。今までそのことを、話したことはないはずである・・・たぶん。

「・・・気になるの？」

ジツと見つめられる。

「ああ、なんか面倒になったから、いいわ」

「何なのよ！じゃあ、聞くな！　あんたがそんな奴だからよ」

説明し始めた。

「そんな奴？」

「不真面目なこと。ここに来る奴って、皆真面目なのよ、それが不良みたいなの。さすがに息苦しくなったの。そんなときに、あんたが目に入ったの。だらしないわ、寝てるわ、聞いてないわ。すぐく、やる気ない。だから、話しかけたのよ」

「・・・ぐう」

「寝るな！」

「ぐふう」

「はあ、聞いてたの？」

「不真面目ってところは聞いた」

「最初のところじゃない！」

「まあ、いいじゃん。あ、チョコパフェきた」

カルボナーラを食べ終わったのを見計らって運んできた。

「・・・どうすんのよ」

奈美が聞いてくる。

「うーん、食べるしかないよねえ」

胃には入りそうだから問題はない。

「こほん。良かったら食べてあげるけど」

「本当？ありがとうございます」

パフェを彼女のほうに寄せる。

「違うわ！半分だけよ」

返却された。

「はあ、分かったよお」

スプーンを手に食べようとしたところで、

「ちよつと、待って。私が先に食べる」

スプーンもパフェも奪われた。

「何なんだよお」

「レディファーストよ」

彼女が一口食べると、頬を綻ばせる。美味しいらしい。

半分なくなったところで、俺に手渡してきた。

スプーンを受け取り、アイスの部分をすくう。

口に運ぼうとしたが、ジーっと見られる。

「・・・食べたいの？」

「違うわよ！早く食べなさい」

見られながら、口に運ぶ。

何故か、彼女は顔を赤くした。

まあ、気にするのも面倒なので、黙々と食べ始めた。

寮に帰り、別れる。

風呂の時刻まで、30分はありそうである。

男子は午後9時からなのだ。

といっても、この寮に住んでいるのは二人だけである。

まあ、適当に寝ておこうと思い、ベッドに転がった。

目を覚まし、時計を見る。

午後の9時半である。

「はあ、風呂入ろお」

寝すぎているため、体が汗臭い。風呂でさっぱりして寝ようと思う。道具を手に、一階の風呂場に向かう。

二部屋分が風呂になっている。

シャワーも二つ、浴槽も二人は余裕で入れる広さである。

ちゃんと、脱衣所も存在している。

ぱっぱと脱ぎ、風呂場に向かう。

がらっ

扉を開けると、

「・・・」

「・・・」

奈美と出合った。

風呂場なわけで、二人とも裸なわけで、小ぶりな胸とかお尻とか、水を弾いている肌とか、大事な部分は少し、湯気とかで見えないけど。

「あれ、奈美じゃん。こんばんわ」

挨拶しておく、彼女は固まったままで、突然震えだし

「この、変態が！」

思いつきり頬を殴られた。

殴った後、彼女は脱衣所に向かった。

俺は浴槽にダイブし、起き上がる。

「はあ、俺が悪かったのかな？」

まあ、どっちでもいいかと思い、湯につかる。

いまさら、体を洗うのも面倒であった。

少女と少年（後書き）

フィクションです

## 授業は退屈だけど、

「はあ、今日もいい天気」

屋上でのほほんとしていた。

このまま、寝てしまえそうな天気である。

「あんたは、いつもここにいるわね」

ツンツンした声が聞こえた。

水色のブレザー、黒チエツクのスカート。赤いリボン。女子の制服に身を包んだ天上奈美であった。

ちなみに、学年ごとにリボンの色は違う。一年は赤で、二年は黒、三年は黄色だったような気がする。

「どうしたのお、昼寝？」

「違うわ！次の授業は実技だから呼びにきたの」

「あつ、そうだったっけ」

俺は半身を起こす。

「はあ、呼びに来て正解だったわ」

実技は必須科目なのだ。

受けないと、過激な体罰を受けることになる。

一回だけ、サボったことがあるのだが、その日は最悪であった。担任に鞭でビシバシ叩かれた。

その時だが、

「私の鞭を喰らって、寝ていたのはお前だけだよ」  
と褒められた。

さすがに、痛いのは嫌なので、真面目に受けている科目である。

「あゝ、行かないと」

「ほら、早くしなさい」

手を引っ張られ、歩き出す。

「今日は、マナの基礎でもある弾丸の生成だ。手本を見せる」

スーツに身を包んだ背筋の良い女性が手を掲げる。その先に、半透明の見事な球体が出来上がる。

彼女は、クラスの担任である赤月涼子先生。まだ、25才らしい。若くて、綺麗なため、男子に人気らしい（美奈談）。

「そして、打つ」

球体が真っ直ぐに飛んでいき、途中で霧散する。

「ペアになって、球体をぶつけあえ、それが今日の授業だ」  
ぴーっと笛を吹き、授業の開始である。

俺の相手は美奈である。一定の距離を離れる。

「行くわよ」

彼女が両手を掲げ、集中する。手の先に歪な球体が出来上がり、

「はっ」

こちらに飛んでくる。

さすがに喰らうわけにもいかないの、俺も片手で球体を作り出す。まるで、俺の感情をあらわしているように、球体ではなく、ぐによぐによした平面が展開された。

それを放ち、ぶつける。

がぎっ

と金属と金属がぶつかった音が聞こえ、弾丸は消える。

「・・・何で、互角なの？」

彼女は不思議がっていた。

「ほう、面白いな」

先生が俺たちを眺め、呟いた。

「天上、私と交代しろ」

そう言って、俺の前に立つ。

「えっ、先生がやるんですか？」

美奈は驚いていた。

「ああ、やる気のない生徒を正してやろうと思ってな」  
さきほどの弾丸が気に食わなかったらしい。

「行くぞ、桜坂！」

手を掲げ、瞬時に出来上がる。そして、発射。

美奈と違い、弾丸の速度が速い。

俺も急いで、先ほどのへによへによを作り、ぶつける。

だが、出来が悪いので貫通してきた。

「ああ」

俺はとつさに伏せ（尻餅）、かわす。

頭上をグオツという風が通り、地面に穴が開く。

「ふむ、反応は良いようだな」

何かを納得したように先生は去っていった。

「だ、大丈夫？」

心配して駆け寄ってくる美奈。

「駄目かも、眠すぎる」

「この、馬鹿！」

殴られました。

その後、数回繰り返し、終了。

「これで、実技は終了だ。今日の感覚を覚えておけ！近々、テストするからな」

俺たちのペア以外は皆ちゃんとした物が出来ていたので、テストは嫌がっていなかった。

「はあ」

隣のため息が聞こえる。

「どうしたの？」

「テストよ、テスト。私たち以外、ちゃんと作れてたじゃない。これじゃあ、補修確定だわ」

テストの成績が悪いと、担任の先生と密着授業となる。

「平気じゃない？」

「あんたは、気楽そうね」

淀んだ空気を垂れ流す美奈であった。

いつもどおり、屋上に向かい、昼食を食べる。

すると、今朝の人物が現われた。

「こんにちわ」

「えっと、こんにちわ」

コークである。俺が手に持っているチヨココロネを興味深そうに眺めている。

「えっと、食べる？」

こくと頷いたので、手渡す。

「もぐ、ふぁ」

顔が綻ぶ。どうやら、美味しかったようだ。

俺はアンパンを手にする。

購買もタダである。そのため、商品がなくなるのが早い。

チヨココロネはレア品で、アンパンは残り物である。

たまたま、残っていたのだ。

「ん、飲み物」

「はいはい」

懐から、水筒を取り出し、渡す。

ごくごくごくとラッパ飲み。

「ん、空っぽ」

水筒を返された。

「美味しかった？」

「ん、何の飲み物かしらないけど」

「これは、ダーズリンという紅茶。秋摘みの奴だから、香は弱いけど、味がしっかりしてるんだよお」

「そうなの」

あまり、興味はなさそうである。まあ、いいけど。

「ねえ、さっきの魔法は面白かった」

「見てたの？」

「うん、へによへによしたの初めて見た」

「あはは、そうだよねえ。俺にしか作れないし」

先生たちにも作れないと褒められた。

「あれ？もしかして、魔法使えるの？」

「うん。ちよつとだけ」

「へえ」

だから、ここにいるのかもしれない。見学かな。

「まあ、いいや。寝よ」

俺は横になる。

「おやすみ」

声をかけられたので、

「うん、おやすみ」

返した。段々と、まぶたが重くなり、眠りについた。

「お嬢様、ここに居られましたか」

しゅたつと、空から降りてくるスーツ姿の男性。がっちりとした体に、サングラスをしている。

「うん、暇だから」

「そうですか。ん？この男は？」

「知り合い」

手にマナを集めたので、即座に答えた。

「そうですか、失礼しました」

マナが霧散する。

「それより、旦那様がお呼びです。行きましょう」

「ん」

彼を眺める。心地よさそうに寝ていた。

それから、男の手を取る。

「少し、荒っぽいですがご了承ください」

「ん、平気」

体を抱えられ、空中に浮く。

そして、彼方に飛行した。

授業は退屈だけど、(後書き)

フィクション

虐めは酷いと思っかな？ (前書き)

フィクションです

虐めは酷いと思うかな？

何故だか、放課後、複数のクラスメイト（男）に呼び出され、人気の少ないところに連れてかれた。

「えつと、何か用かな？」

理由も不明で、聞くしかない。

「お前、生意気なんだよ」

蹴飛ばされ、体が地面に倒れる。

「いたた」

手が運悪くすれてしまい、血が出た。

「マジさ、なんか赤月先生に気に入られてるとか、気に食わないんだけど」

「えつ、そうなの？」

そうとは思えなかった。

「はっ！ウザ！」

また、蹴られた。

「自覚ないとか、生意気だよ。その態度とか、本気で気に食わないんだよね」

「これって、地だから直しようがないんだよね」

「だったら、死ねよ」

手の平を向けられる。そこに、半透明の小さな球体が出来上がる。

「あゝあ」

「今さら、後悔しても遅えよ」

弱者をいたぶり、ニヤニヤと笑う集団。

いや、これは脅しであろう。打つ気はあっても、当てないであろう。

「何をしている」

突如、凜とした声が辺りに響く。

「えっ？」

注意が逸れ、魔法の制御が離れる。弾丸が俺の顔に迫り、

「あつ」

魔法を制御していた男が間抜けな声を出す。

「桜坂！」

赤月先生が見えた。魔法を構築し、打ち落とそうとするが間に合わない。

額に魔法の弾丸がぶつかり、俺は気を失った。

目を覚ますと、薬品の臭い、白いベッドの上にいる。

「ふう、目を覚ましたか」

ベッドの隣で椅子に腰掛けている赤月先生。安堵した顔をする。

「あれ？何で？ここは何処？」

あまり、記憶がない。というか、ぼんやりとしていた。

「お前は、マナの弾丸を喰らって気絶したんだ。私が間に合えばよかつたんだが、当たってしまった」

申し訳なさそうにする。

「え？そうなんだ。いたた」

意識がはつきりとしてくると、額が痛み、手を当てる。だが、包帯の感触があつた。

「ああ、触るな。皮膚が削れてたからな。処置はしてあるから、明日には直る」

近くのゴミ箱を見ると、赤いティッシュが大量にあつた。

「処置？」

「魔法でな」

便利なものである。

「それにしても、あいつらは許せんな。一人に複数で襲い掛かって「あれ？そういえば、あいつらはどうしたの？」

「お前を運ぶのを優先したからな。逃げたよ。まあ、主犯格の男は分かつてるから問題ない」

そいつらは、先生の特別授業で鞭で叩かれるのであろう。

「先生は何であそこに居たんだ？」

「マナが動く気配がしたからな。気になって行って見たらお前たちが居たってわけさ」

「へえ」

「まあ、平気そうで安心した。気をつけて帰れよ」  
先生が立ち上がる。

「あ、ありがとうございます」

お礼を言うが、

「そんなもんはいらん。助けられなかったしな」  
断られた。

先生が保健室から消え、一人。

「はあ、面倒だなあ」

自分は何もしていないのに、周りが巻き込んできた。それも意味の分からない因縁で……。

起き上がり、体の調子確かめる。

「……問題なさそう、帰ってもう一眠りしよ」

だが、夕飯の時間になると現われる隣人を思い出し、面倒な気分になった。

思ったとおり、寝ていた俺の額を見て驚き、興奮？慌てていた。とりあえず、ファミレスに向かい、事情を説明。

「そんなことがあったんだ。てか、そいつら許せない！」

「まあ、先生に見つかつたんだから、お仕置きされるし」

「その程度で済むとかありえない！」

イライラとする奈美。カルシウム不足なのだろうか。

「そういえば、どうやって運んだんだろう？」

純粹に疑問に思った。

「魔法でちよちよいでしょ。赤月先生って、有名な魔法使いだし」

「そうなの？」

「はあ、知らなかったのね。先生はね、魔法治療の権威よ。彼女が医療魔法を作つたんだから」

「へえ、そうなんだ」

「あんまり、感心してるように見えないわね。すごいことなのよ。魔法は元々、攻撃用としか考えられてなかったんだから。魔法で医療なんて無理だって思われてたし」

「まあ、いいじゃん。食べないと冷めちゃうよ」

すでに、料理は運ばれていた。

「はあ、あなたは本当に興味なさそうね」

感心された。

今日はタラコスパゲッティ。

デザートは、なしである。

俺の料理は、彼女が決めた。ろくな物を頼まないかららしい。まあ、手間が省けたのでいいけど。ずるずると食べる。

「・・・汚いわね」

食べ方に文句を言われた。

屋上、再びな男（前書き）

フィクションです

## 屋上、再びな男

朝。

一階、共同トイレにて。

「……」

座っている美奈。

扉を開けたままボーっとしている俺。

まあ、座っているの、下半身は見えているが、大事なところは手で隠されている。

「……この馬鹿あ！早く閉めて！」

「あ、ああ、そうだよな」

俺は急ぎドアを閉める。

「……なんで、居るのよ」

「えっ？」

まだ、トイレにいる俺。

「出てけ！」

「すみません」

急ぎ、出た。

ジャーつと流れる音が聞こえ、赤面した少女が出てくる。

「……」

ものすごく、睨まれたので、顔を逸らす。

「言っておくことがあると思うんだけど」

「すみませんでした」

頭を下げた。

「はあ、鍵を閉め忘れた私も悪いから、まあいいわ。良くないけど」

「うん、見えてないから安心して」

「つつさい！」

頬を抉るように殴られました。

教室に入ると、顔を腫らした少年たちに見られたが気にしない。絶対、鞭の痕だけど、涙目だけど、俺には関係ないはず。

鞆を置いて、屋上に向かった。寝転がり、空を眺める。

曇り空であった。

「はあ、なんか退屈だなあ」

良い事ではあるのだが、しっくりとこない。もやもやとしているのだ。

「そうなの？だったら、私と遊ぶといい」

突然と現われるドレス少女。ユークであった。

「遊ぶ？何で？」

「お医者さんごっこでも何でも」

ずいぶんとマニアックな遊びを提案された。

「却下だね。面白くなさそう」

「そう？私の体を眺めてハアハアって息を荒くしそうだけど」

「そんな変態じゃないから」

平然と言う彼女。俺は訂正しておいた。

「でも、朝にトイレに入って女性の下半身を眺めて興奮してた」

「見てたのかよ！」

「たまたま、通った」

「別に興奮はしてないよ」

うん、脳裏に焼きついているけど、興奮はしていない。

「そう言いながら、深夜に一人シコシコする夜季であった」

「変な締めかた止めて！しないから」

目を見開かせ

「まさか、そっちの気が？」

「ないから。女の子にしか興味ないから」

「だったら、私とお医者さんごっこすれば、興奮する？」

「そうですね。します」

もう、諦めた。

「うん、満足」

本当に満足そうであった。

「ねえ、何でここに来るの？」

「ここは、あなたの所有物ではないはず」

「そうだけど、俺がいるときに来るじゃん」

「それは勘違い。あなたがいなくても、ここに来てる」

「ふくん、そうなんだ」

「ん？私に興味があると見た」

「まあ、ないわけじゃない」

「曖昧な表現」

「聞きたいほど、興味があるわけじゃないからね」

「そう。だったら、話さない」

彼女は口を閉ざした。本当に話さないらしい。

まあ、いいけど。

目を閉じる。

思考を止めて、眠気に身を委ねる。

「・・・おやすみ」

そんな声が聞こえた気がした。

「ねえ、夜季？あなたは魔法使いになりたい？」

目の前に視線を合わせてしゃがむ女性。

穏やかな顔をした、自分の母である。

「なりたくない」

「どうして？」

「だって、面倒だもん。二人見てたら忙しそうだし」

両親は二人とも、国家魔法使い。毎日、仕事で遊べるのはごくたまにであった。

「ふふ、そうね。でも、やりがいのある仕事よ。私たちが頑張れば笑顔になれる人が多くなるんだから」

「やだ！自分が笑顔になれないもん」

「あなたはそういう子だもんね。でも、いつか分かるわ。他人のために頑張ることの素晴らしさに」

「分かりたくない」

「あら、残念」

母は時計を見る。

「もう、こんな時間。一人で帰れるわね夜季。お母さんは仕事だから」

「うん。しつかりしてるから大丈夫」

少しだけ、悲しそうな顔をする母。

「そうね。夜季はしつかりしてる。それじゃあ、行ってくるわ」

「いつてらっしゃい」

母は空に飛んでいった。

公園に一人残される自分。

「帰って寝よ」

それしかやることはなかった。

「・・・夢か」

目が覚めた。

懐かしい夢である。

子供の頃、幼稚園くらいであろう。

一人でいる時間が多かった。優秀な魔法使いだった両親。

そのため、仕事の量も多い。

休みもなく、働き続けていた。

だが、ある日。帰ってこなかった。

小学校三年のときだったと思う。

両親の変わりに、スーツの男が現われ、行方不明と言われた。

仕事の内容は国家機密で明かされず、両親の行方も分からない。

俺は孤児院に引き取られた。

身内には嫌われていたのだ。魔法使いは、一般人には嫌われている。そのときは、魔法は使えなかったが、両親が魔法使い。だから、俺

も使えると思っていたのであろう。

「はあ、憂鬱」

「何が憂鬱よ」

近くで声がした。見ると、俺の横で座り、弁当を食べている奈美。

「あれ、居たんだ」

「まあね」

周りを見渡すが、彼女しかいない。

「俺、寝言言つてなかった？」

「例えば？」

「奈美の今日の下着は白だなんて」

「変態！」

殴られた。朝のトイレで確認したのだ。

「はあ、痛い」

「自業自得よ」

ふんとそっぽを向く彼女。

「ていうか、昼休みなのか」

「ええ、よく寝てたわね」

「そっか、寝よ」

「まだ、寝るの？」

「だって、やることないし」

「あるわよ。学生なんだから」

「俺はいいの。不真面目な学生だし」

「はあ、相変わらずね」

彼女は弁当を食べるのを再開する。

「魔法使いで良かったか？」

「どういう意味？」

「魔法使いの才能があつて、不満じゃないのかってこと」

才能がなければ、普通の人生が送れていたであらう。

「ああ、私は良かったわ。家を出れたし」

「仲が悪いのか？」

「まあね。意味もなく、よく殴られてた。家を出れて嬉しかったわ」  
彼女も色々とおつたらしい。

「でも、落ちこぼれつてのは嫌だけど」

「まあいいじゃん。俺のほうで落ちこぼれだし」

「あんたよりマシつてのもね。真面目にやってないじゃない」

「あれが実力だよ」

「嘘くさっ」

信じてもらえなかった。

「そう言えば、額の怪我は治ったの？」

「ああ、痕も残つてない」

すでに、包帯は外してある。

「やっぱ、凄いのね。赤月先生」

「自分で言つてたじゃん。凄い先生つて」

「見たことがなければ、本当に凄いかなんて分からないじゃない」

「そうだけどさあ」

ふあつと欠伸がでる。

「あんたも、ある意味ですごいけどね」

「そりゃあ、どうも」

だんだんと眠たくなつてきた。

「どんだけ寝れば気が済むのよ！」

「一生」

「植物人間にでもなつてろ！」

それはいい。けど、寝る楽しみが味わえない。起きているからこそ、寝るのが楽しいからだ。

「ここに居やがったか」

ドアが開く音と、声が聞こえた。

「あんた、佐々木」

男の名前らしい。

どこかで、見覚えがある。特に鞭の痕が。

「何しにきたのよ」

「天上、お前には用はねえよ。そこで寝転がっている奴に用があるだよ」

「もしかして、夜季に怪我を負わせたの、あんたなの？」

「ああ、そうだけど。そのせいで、こっちも怪我させられたけどな。見せびらかすように、赤くなっている腕を見せてくる。」

「それは自業自得じゃない」

「うっせえ！てめえは関係ないんだから、すっこんでろ！」

「なっ！」

切れそうな奈美を起き上がり俺は手で制す。

「話があるんだったら、俺がするし。こいつは関係ないんだし、下からせてもいい？」

「ああ」

「ちよっと」

彼女の言葉を遮り、

「まあ、危なくなったら逃げるから」

「・・・本当ね？」

頷く。

奈美は渋々、屋上から去る。

「ふん、カツコつけやがって」

「うーん、そんなつもりはないんだけど」

頭をポリポリと掻く。

「マジ、お前見てるとイラつくんだよ」

「それはゴメン。気にしないほうがいいんじゃない？」

「そういう態度とか、マジでムカつく。俺にやられたの覚えてないのか？」

「ああ、あれは痛かったね」

額を摩る。

「お前が余裕そうにしている理由は分かってたんだよ。教師が駆けつけてくると思ってたんだろ？」

「まあ、そうかも」

「でもな、今重大な会議をしてるらしいぜ。駆けつけてくるかな？」  
「どうでもいいよ。で、話って何？」

「お前を叩きのめしてやる。学校に来れなくなるぐらいにな」  
両手を構える。

マナが手のひらに集まっていき、球体が出来上がる。

「はあ、めんどい」

俺も片手でグニヨグニヨした物体を作る。

「はっ、それじゃあ天上のは防げて俺のは防げねえよ」

「かもねえ」

同時に放つ。

やはり、貫通してきた。

顔面に当たるが、それほどのダメージはない。

「なっ、練りが甘かったか、もう一度だ」

再び集中し、球体が作られる。先ほどより一回り大きい。

俺も作る。

「今度ので、終わりだな」

勝ち誇った笑みを浮かべ、放たれた。

今度も同じように突き破られ、俺に当たる。

「なっ、何でだよ」

彼は驚いていた。俺が平然としているからである。

「あれ？手加減してくれてんの？ありがとうねえ」

「くっ、マジで意味わかんねえ」

悔しそうに、唇を噛む。

「私が教えてあげる」

声が聞こえた。音の方向を見るとユークがいる。

「誰だ、てめえ！」

「悪党に名乗るほど、安くない名前」

馬鹿にしていた。

「くっ、死ね！」

マナの弾丸が彼女に向かっていくが、

「この程度？勉強不足」

同程度の弾丸をぶつけ相殺させる。

「くっ、ありえねえ、ガキにやられるなんて」

「ん、馬鹿にされた」

彼女が集中する。手のひらの先に大量のManaが集中する。

「んげ」

慌てて、俺は彼女を止める。

「止めるよ。怪我じゃすまないから」

手をはたくと、集中していたManaが霧散する。

「ん、何で止める？」

「だってさ、怪我されたら、後味悪いし」

「やられたら、やり返すのが普通」

「俺は普通じゃないんで」

渋々、下がる彼女。弾丸の威力が下げられていたのは、彼女のおかげだろう。どうやったのかは知らないけど。

「はっ、いいのかよ？あいつがないと負けちまうぞ」

何時から、勝ち負けになったのであろうか。

「いや、不戦敗らしいね」

「そうだな」

登場する赤月先生。

佐々木の表情が固まる。

「どうやら、あの程度では反省しないようだな。可哀相だが、小暮先生に任せることにしよう」

先生が、彼に手を向ける。すると、シュッと手と足が半透明の手錠で縛られる。動きが制限され、芋虫のように地面を這いずる。

「や、やだ。小暮はやだっああああああああああああああ」

ちなみに、小暮先生とはマッチョな中年男性。

少し、というか、かなり気持ち悪い。だって、オカマだもん。

悲痛な叫びを放ちながら、連行された彼に俺は敬礼。

「頑張れ」

彼が正常な道を歩めるか不安であった。

特別授業を機に、別の性に目覚めなければ良いが……。

ふと、辺りを見渡す。

屋上には俺しかいなかった。

「ありゃ、お礼言いたかったのに」

ユークはいなくなっていた。

少女襲来(前書き)

フィクションです

## 少女襲来

「はあ、ただいまあ」

寮の自室に戻った。

「おかえり」

そんな声が聞こえた気がしたが、気のせいであろう。だって、一人暮らしたし。

普通に、鞆を置き、制服を脱ぐ。

パツパツてな感じで、パンツ一丁トランクスになって、変な感じがした。

・・・ものすごく見られているような。

ベッドを背に向けて立っているのだが、ベッドから視線を感じた。

恐る恐る振り向くと、何故かユークが目を手で覆い隠し、指の隙間から覗いていた。

「・・・何してんの？」

「暇だから、遊びに来た」

「そうですかあ」

とりあえず、服を着替える。

「でさ、何で俺の部屋を知ってんの？」

言っておきながら愚問であったことに気がつく。彼女は俺がこの寮に住んでいることを知っているのだから。

「結構前から出入りしてた」

「マジで!？」

衝撃の事実である。

「俺のプライベートはどこにいったの？」

「平気、ベッドの下に隠してある高校生物のエロ本は隣の人も知ってるから」

と、奈美がいる部屋を指差す。

「そ、そうなの？」

「ん、でも安心。本命の巫女物は私しか知らない」

ぐふう、とダメージを受けた。

「な、何でそのことを」

「部屋を物色してたら出てきた。まさか、辞書の中にあるとは思わなかった」

「ばれないように、気づかれにくいところに隠したのに……」

「まあ、落ち着く。神聖な存在に手を出そうとしたのが間違いなんだから」

「そうですねえ。罰が当たったんですね」

まさか、知り合って間もない人物に興味が発覚されたのは、心が痛すぎた。

だが、それだけで終わるわけではなく、

ドンドン

ドアが叩かれた。

そして、開かれるドア。

「……」

入ってきた人物はベッドの上に腰掛けているユークを眺めて、停止していた。

「あれ、奈美どうしたの？」

「こんばん」

ユークも挨拶する。

奈美はそれで、正気を取り戻し、ぎこちない動きで俺を眺め、

「……この幼女趣味が！」

「ちがいまぶう！」

殴られました。

「迷子なんだつたら先に言いなさいよ。勘違いした私が馬鹿みたいじゃない」

「言う前に殴られたけどねえ」

「うっさい」

「奈美は怒りっばい」

「うっ」

ユークの言葉に、息を詰まらせ、シユンと大人しくする奈美。  
ユークもいるので、ファミレスにて持ち帰りのできるピザを頼んで、俺の部屋で食べているのだ。

「何で、私に相談しないのよ」

「えっ、面倒だったし、いつもユークって勝手に帰るから」

「いつも？」

ものすごく睨まれた。

「ん、学校でいつも会ってる」

「そうなんだよねえ、屋上で会ってるんだあ」

「もしかして、授業をサボってる理由って、この子と会いたいから？」

変な勘違いをされた。

「違うし。屋上に行くのは寝たいからに決まってるじゃん」

あっ、段々と眠たくなってきた。

「そうよね。・・・あはは」

乾いた笑いが聞こえた。

「そっだ・・・ぐう」

「寝た!!」

奈美の声が聞こえた気がした。

「はあ、何でこいつはこうなのかしら」

呆れたような声を出しているが、表情はどこか嬉しそう。

「・・・奈美は夜季が好き？」

「ち、違うわよ!!」

慌てる彼女。ある程度は当たっているのかも。

「そ、それより、ユークだけ？家に帰らなくて平気なの？」

すでにあたりは暗い。心配しているのである。

「平気、ここに泊まるから」

「ここ？」

「ん、夜季の部屋」

「だ、駄目よ！」

「でも、泊まるどころない」

「はあ、仕方ないから私の部屋に来なさい」

案内、優しい人なのかも。どこか、ツンツンしているように思えるけど。

「じゃあ、行くわよ」

寝ている夜季に毛布をかけ、部屋を出た。

「ねえ、何してるの？」

公園の砂場で城を建造していると、声をかけられた。

「見て、分かんないの？城を作ってるの」

「面白いの？」

「まあねえ、どんだけ精巧に作れるかが楽しい」

一生懸命、手で砂を盛っていく。

「私も手伝ってあげる」

目の前の砂の山にどさあつと大量の砂が落ちてくる。

慌てて声の人物を眺めた。

金色の髪をした幼い少女がいた。

「お前、魔法使い？」

「ん、そう。あなたもでしょ？」

「俺？俺は違うね。今は砂職人だから」

近くに置いてあった水の入ったバケツを山にかける。

ぺたぺたと砂を削ったり、重ねたりする。

今は外壁を作っているのだ。

「・・・ん、分かった。反対側をやってあげる」

俺の作業を見て、だいたいやり方が分かったのであろう、少女は反対側に周り、ペタペタとやっていく。

少女を見てて、あまり楽しそうではないのが分かる。

それに、綺麗なドレスが土で汚れ始めた。

「待った、他のことをしよう」

「他の事？」

「ああ、おままごととかな」

「おままごと・・・」

「知らないの？家庭の模倣をして遊んだり、お医者さんごっことか、職業の真似事をしたりな」

「へえ、面白そう」

少女の瞳に光が籠る。

「じゃあ、俺が父親役で、お前が母親役な。設定は浮気した旦那。

その情報を今朝手に入れた妻ってな感じで」

「ん、分かった」

少し、距離を開け、

「ただいま」

疲れた感じをアピールする。

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それ、と、も私？」

演技を止める。

「違うよね。浮気が分かってるのに、誘う人はいないよね」

「ん、他の女の魅力に誘惑された旦那を自分の魅力で連れ戻そうとする妻って感じ」

「あ、そうだったの」

妙に納得してしまった。

「じゃあ、はじ・・・」

言葉が途切れたのは、スーツ姿の厳つい人が現われたからである。

「お嬢様。お時間です」

「ん、分かった」

彼女は立ち上がる。

「えっと、もう終わりかな？」

「ん、また今度」

また会えると思うと、少しだけ嬉しかった。

「おう、また今度な」  
彼女たちの背を見送った。

## 幼女と変態

「んんっ」

寝返りを打つ。

手を動かし、何かを掴む。

ふよつとした感触、気持ちよいので顔をうずめる。

「あっ」

なんだか、艶かしい声が聞こえた気がした。

まあ、気のせいだろうと思いつつ、抱きつく。

顔をぐりぐりし、柔らかい感触を楽しむ。

「んっ、あっ、やっ」

さすがに、おかしいと思いつつ、目を覚ます。

「・・・」

見上げると、奈美の顔があった。

目を閉じて眠っている。

ということはと思い視線を戻すと、小ぶりなお山が目の前に

よく見ると、彼女はパジャマ姿。

辺りを見渡すと、自分の部屋。それもベッドの上にあった。

「・・・まあ、いいか」

夢だと思い、抱き寄せ、再び眠りについた。

「きゃあああああああああああああああああああー！」

そんな叫び声で起きる。

つんざくような悲鳴で、耳を手で覆う。

悲鳴の主は奈美であった。

「な、なんで、夜季がいるのよ」

意味不明なことを言う。

「それは、こっちの台詞だよ。俺の部屋だし」

辺りを見渡す。間違いない。

「・・・確かにそうね。あれ？何で私、ここにいるの？」

「寝ぼけてたんじゃない？」

「そ、そうね。じゃあ、私帰るね」

そそくさつと帰っていく。

「・・・あれ？」

もしかしたら、あの感触は夢ではなかったのかもしれない。

それは、それで惜しかったような、嬉しいような。

ふと、テーブルの上を眺めると、手紙があった。

手に取り、文面を眺めると、

「夕飯のお礼。それで、今夜のオカズは大丈夫。ユーク」

彼女の仕業らしい。

後で、感謝してもいいかもと思った。

「ねえ、ユークちゃんどうしたの？」

「帰ったんじゃない？」

「あなた、心配じゃないわけ？」

「だってさ、居場所すら分からないわけだし、心配してもしょうがないじゃん」

彼女は渋々納得する。

寮を出て、一緒に登校しているのだ。

「・・・ねえ、変なことしてないでしょうね」

「ぶっ、するわけないだろ」

「何よ！その言い方は！」

怒らしてしまった。

「まったく、最低」

ツカツカと先を歩いていく。

ついていこうとするが、だるいので止めておく。  
ぼーっと歩いていると、

ドン

彼女にぶつかった。

「痛いわね！」

「止まるなよ」

「仕方ないじゃない。あれ」

と、先を指差す彼女。

見てみると、校門のところに貼り付けられている裸の男。

人だかりができていた。

「うわっ、変態だ」

「違うでしょうが！誰かにやられたんでしょ」

確かに、意識がなさそうである。でも、興奮しすぎて気絶したのか  
もしれない。

「てか、あれって佐々木じゃない？」

「誰？」

「クラスメイト。あんた、つい先日攻撃されてたじゃない！」

「ああ、あの男ね」

思い出した。

「ていうことは、赤月先生の仕業じゃん」

「私ではないぞ」

耳横から聞こえた。

「きゃっ！あ、赤月先生」

驚く、奈美。

「じゃあさ、小暮先生じゃん」

まさか、特別授業でここまでやるとは……。

とても、佐々木が惨めである。小さな皮付きキノコを晒し、女子に  
笑われることであろう。

「それが、分からのだよ。小暮先生が行方不明でな」

「行方不明？」

奈美が聞く。

「ああ、この件について聞こうとしたが、連絡が取れん。家にもい  
なかった」

だから、背後から現われたのかと納得した。

「ていうか、回収しなくていいの？」

ずっと、放置されていたようだし。

「まあ、いいんじゃないか？あいつは調子に乗ってたからな、反省するいい機会だ」

酷い先生であった。

「ふんふんふん」

鼻歌を奏でながら、屋上でのほほんとする。

「・・・」

何で、こんなにも上機嫌なのかと言われれば、暗い雰囲気は漂っているからである。

屋上に到着するなり、泣いている少女がいたのだ。

もちろん、知り合いではない。

腰まである長い髪。可愛らしい大きな目。赤いリボンをしているところから、同級生だと分かる。

いつものように、寝る体勢に入る。だけど、

「ぐすぐすぐす」

泣き声が気になってしまう。

だが、耳をふさぎ、寝るのに集中する。

「ぐす、ぐす、ぐす」

駄目だった。

「もう、やめてください」

「ふえ」

びくっと驚く少女。俺のことに気がついていなかったようだ。

「だから、泣くのを止めてください」

「ご、ごめんなさい、ぐす」

泣き声であった。

「はあ、どうしたの？」

「な、なんでもありません。気にしないでください」

「でもさ、泣き声が気になって眠れないんだよねえ」

「あ、もしかして、桜坂君ですか？」

「あれ？何で知ってるの？」

「よく、赤月先生がダラケきった桜坂という生徒がいるって言うてました」

「へえ、嫌な紹介のされかただねえ」

「自分のことですよ！」

「あ、そうだったけ」

「そうですよ」

「あはは」

適当に笑っておく。彼女も釣られて笑う。

「うん、泣き顔よりそっちのほうが可愛いよぉ」

「ふえっ」

顔を赤くする少女。

「で、何で泣いてたの？」

「そ、それは・・・」

「やっぱり、いいや。眠いし」

俺は横になる。

「聞いておいてそれですか」

「だって、話したくないんでしょ？」

「そうですけど」

「だったら、いいじゃん。泣き声もなくなっただし、寝れそうだし」

「はぁ、先生の言ったとおりの人です」

その後は、特に声も聞こえず、眠りに落ちた。

Sクラスの少女(前書き)

フィクションです

## Sクラスの少女

「ふ、ふあゝあ」

大きな欠伸が出てしまった。

寝起きだから、仕方ないことである。

まあ、辺りは赤く染まっているけど。

昼前から、夕方まで寝ていたことになる。

「かなり寝てましたね」

声をかけられた。見ると、少女がまだ居た。

「あれ、ずっと居たの？」

「はい。授業には出たくなかったので」

「じゃあ、サボっちゃったんだ」

「はい、サボっちゃいました」

にこやかに微笑む。

「さてと、寮に戻らないとうるさい人がいるからな  
立ち上がる。」

もちろん、うるさい人とは奈美のこと。帰るのが遅いということ  
質問攻めにされそうだ。

「じゃあ、一緒に帰りませんか？」

「え、どっちでもいいけどお」

とぼとぼと歩く。俺の後ろをついてくるように彼女も歩き出した。

「そっついえばさ、名前は？」

「あつ、自己紹介してませんでしたね。私は双葉涼子です。魔法科  
のSクラスに所属してます」

今さらだけど、この魔法学園では複数の学科に分かれている。

魔法科、魔法を操る力を鍛える学科。解析科、マナを分析、有効利  
用しようとする学者が集まる科。

あとは、戦略魔法科。軍人を目指す人の科である。戦闘のプロフェ  
ッショナルとでも言っておこう。

それで、クラスはS A B C D E Fと分かれ、Sクラスは優秀な人が集まっている。

S以外は特に能力分けはされていない。

「へえ、じゃあ優秀なんだねえ」

「ええ、そうなんですけど。私は未熟ですので……。才能はあるらしいんですけど、魔法を操ると失敗しちゃうんです」

「失敗？」

「はい。・・・爆発しちゃうんです」

それは大層な失敗であった。

「ていうことは、クラスの連中に馬鹿にされるとか？」

「はい。それで、屋上で泣いて　はっ」

「そうですかあ。悔しくて泣いてたのね」

「・・・はい」

しょんぼりとする、えつと双葉ちゃん。

「まあ、いいじゃん。爆発するんだし。俺なんてマナの弾丸が平べつたくなっちゃうもん」

「いえ、私よりマシですよ」

「いいや、俺のほうが・・・」

延々とループしそうだったので打ち切る。

「まあ、習って一年も経ってないんだし、いずれ爆発しなくなるでしよ」

「前向きですね」

「じゃないと、生きてけないでしょ。暗いまま過ごしたってつまらないし」

「それはそうですけど」

「あゝもう！笑えって」

「え？」

「そんな暗い顔を見せられるとこっちまで暗くなる。気持ちよく寝られないじゃん」

「ええ！そんな理由ですか」

「いいの。難しく考えすぎだつて、爆発しちゃった、てへっぐらいの気持ちでいなよ」

「そ、それは駄目ですよ・・・ぷっ」

何かが面白かったのか、くすくすと笑う。

「そ、その顔が一番。人生楽しく生きないと」

「寝てばかりの人が言いますか？」

「それが楽しいことだから、仕方ないんだよお」

「あっ」

道を歩いていると、前方にて奈美がいた。こちらを見て固まっ

プルプルと震え、こちらにズカズカと歩いてきては、

「待たせてるくせに女連れかよ！」

「ぐふお、誰も頼んでないんですけどお」

殴られた。

地面をズサーッと滑り、手とかが擦れてヒリヒリする。

「な、何するんですか！」

「別にいいじゃない。てか、誰よ！」

「桜坂さんの友達です！」

「そんなこと聞いてないわよ！名前よ、名前」

「双葉涼子です。Sクラスの」

Sと聞いてか、奈美の眉間に皺ができる。

「はっ、エリートの人が屑の夜季と友達？あんた、なに考えてんのよ」

「桜坂さんは屑じゃないです。あなたこそ、何なんですか！」

「私は、クラスメイトの天上奈美。夜季の世話係よ」

「そうですね。でしたら、結構です。私が変わりに世話係になりますから」

ていうか、世話係って何だよ。

「はあ、何様のつもりよ！」

「そちらがです！」

むむむっと、にらみ合う二人。

「ああ、面倒だなあ。ぐう」

寝ることにした。

「寝るな！」「寝ないでください！」

すぐに起こされた。

まあ、何とか仲直り？して、二人とも俺の世話係になった。

あれ？何かおかしい気がするけど、まあ考えるのも面倒なのでやめておく。

仲良く？三人で食事を終え帰宅。

やはり、Sクラスということに住んでいるところは俺たちのボロアパートと違い、ホテルみたいところで、

「ベッドが柔らかそうだなあ」

「それだけ！」

奈美に突っ込まれた。

まあ、そんな感じで別れ、部屋に帰宅。

無性に疲れて、眠りについた。

風と少年（前書き）

フィクション

## 風と少年

「危険なの」

言葉とは裏腹にユークの表情は無表情。というか、慌ててすらいない。

「どんな感じで？」

いつもどおり、屋上で寝ていた俺。彼女が現われ起こされた。

「えつと、あんな感じ」

彼方を指差す。

俺は釣られて眺めると、

「いい風だ」

髪の毛が大変なことになっていた。

迫り来る強風。禿げそうなほど、髪の毛が後方に流れる。

「な、何事だ」

ドアがバンッと開き、赤月先生が登場。俺を見るなり、

「桜坂！お前の仕業か！」

「えつ、違います。寝ていただけですし」

「そ、そうか」

なんとか、容疑者から免れた。まあ、成績の悪い俺が起こせる風だとは思わなかったのだろう。

「というか、何なんだこの風は？」

「まあ、すごいですよね」

大型の台風でも起きているのかと思えてしまう。まあ、一方向からしか流れてないけど。

「やっぱさ、寝るしかなくね？寝てればいつかおさまるんじゃない？」

言いながら、地面に横になる。

「なるか！」

赤月先生に言われた。というか、蹴られました。

「おお、ナイスアイディア」

今さら、ユークが賛同してきた。

「ん？誰だお前は」

「私、ユーク」

「そうか、赤月涼子だ」

「うん、知ってる」

「……」

自己紹介も終わり、寝る準備に入ったのだが、赤月先生に胸倉を掴まれた。

「なあ、この子供は何だ？」

ものすごく、にらまれてしまう。

「えっ？知らないっす。マジで、自分もわからないっす」

「しらばっくれるな！」

頬をビンタされる。

「私は夜季の許嫁」

頬に手を添えて、恥ずかしそうにする。

「マジで止めて！」

「貴様は……ロリコンがあー！」

次々と左右に移動する顔。往復ビンタされました。

というか、先ほどより風が強まったような気がする。

「な、ナンダトオ！僕の、僕のマイレディに。いや、麗しきプリンセスに許嫁だとおー！！」

魂の叫びが辺りに響く。

風の発信源らしき場所から、男が現われた。

空中に浮かぶ、白い服に身を包んでいる。長い銀色の髪。ふあさつ

て感じで靡いている。

綺麗な顔立ちをした美少年であった。

「いや、まさか、まさか！僕が許嫁なのかあー！！」

言葉と同時に爆風が吹き荒れ、体勢が崩れる赤月先生。持ち上げられていた俺も同様になってしまう。

「違う。許嫁はこっち」

と、ユークが俺を指差し、男が眺め

「女同士かあ！！でも、それもいいかも」

風が収まり、男が屋上に着陸した。

ふあさつて、髪をかきあげ、こちらに優雅に歩いてくる。

「ユーク嬢、お久しぶりです」

「ん、テレッテも久しぶり」

テレッテて名前らしい。というか、知り合いらしい。

「して、先程の話は本当なのでしょう？女同士、素晴らしい！と思います、百合は駄目では？いえ、自分的にはとても、見てみたい気がしますけど。いや、でも嬉しいような悔しいような気分になりますし。だから、他にも結婚相手を用意されては？自分とか、自分とか、私とか！！」

ものすごい早口で、自分を猛烈アピールしていた。

「違う」

「へっ？」

「許嫁は女のほうじゃなくて、男のほう」

テレッテがこちらを眺め、俺をジッと見てくる。

手をぶらぶらと振り、

「ハロー」

挨拶しておく。

「貴様があ！！お嬢様をたぶらかす不届き者があ！！」

風が吹き、睡とか声が飛んでくる。

「落ち着くの。冗談だから」

「じょうだん？・・・ははは、そうでしたか。さすがお嬢様、面白

い冗談。ナイス！」

ビツと親指を立てる。

「いや、何でもいいんだけどさ。こいつ誰なの？」

俺はテレッテを指差した。

「テレッテは、私の護衛。これでも優秀な魔法使い」

「テレッテ・・・あの、テレッテか！5歳にして最年少魔法使いに

なった子供。風を操ることに關しては世界で並ぶものがないと言われる、あのテレツテか！」

赤月先生が驚いていた。

「えっ？そんなに有名人なんですか？」

耳打ちする。

「ああ、私は日本で有名だが、あいつは世界で有名なんだ」

「はあ、どっちも凄いなと思うけど」

「一国じゃなくて、世界。まあ、俺にはでかい話で実感はない。

「じゃあさ、そんな奴を護衛にしているってことはユークもすごいわけ？」

「ん、当たり前。こいつが歩いてきたら、いきなし、あなたを守らせてください！って言われただけ」

それは凄いのか、判断に迷う。

「そう、その日から私はユーク様の護衛。近づくな！男は近づくな！」

しっしと追い払われてしまう。

「さあ、帰りましょう。ここにはゲスな男がいます。ユーク様の気分が悪くなってしまうっては大変です」

「ゲスって、自分のことかな？」

「そうだ！」

「あつ、自分って認めた」

「は？・・・そういう意味か！違うぞ、私はただ・・・そう、か弱い女性をほっとけない・・・別に、ユーク様があまりにも可愛かったからじゃなくて・・・幼女趣味はないぞ！・・・男として女性を守るのは当然だろうが！私はゲスじゃない！」

最後のほうは逆切れされた。

「ん、夜季。また、今度」

「え？おお、分かった」

ユークが空中に浮き、どこかに飛んでいった。

「お待ちください。私も付いていきます」

テレットがそのあとに付いていった。

「・・・お前は、トラブルメーカーなようだな」

「ただ、寝てるだけなんですけどお」

そんな感じで、赤月先生に指導室に連れてかれ、鞭の刑にされた。  
理不尽だ！！

ダリイねえ（前書き）

フィクション

## ダライねえ

「あゝ、だるい」

午後の授業。外にて実技訓練。

この前と同様の弾丸精製。

だが、何故か俺の相手は裸の人と呼ばれている（俺がすっかり言っ  
てしまったら、広まった）佐々木である。

恨みがましい目で見られているが、身に覚えはない。

「てめえ、覚悟しろよ」

理不尽である。広まると思って、言ったわけではない。云わば事故。

「はあ、めんどい」

空を眺める。青々とした空。ところどころ流れる白い雲。

なんとも心地よく眠れそうである。

ふと、目の前の人物を見る。

そこでは手をこちらに掲げ、弾丸を精製している佐々木。

「あれ喰らって気絶したら、保健室で寝れそうだな」

周りに聞こえないように呟く。

そう思うと、俺の行動は早かった。

同じように手を掲げ、グニョグニョ弾を作り出す。

「死ね！」

物騒な言葉と共に、弾丸が迫ってくる。

俺も放ち、ぶつけ合わせる。少し違うのは弾に俺のグニョグニョが  
絡み付いているところであろう。

周りに気づいているものはいそうになく、安心。

弾が顔面に迫り、当たった勢いで俺は地面に倒れた。

「ふふ、あつはっは。なんて暢気な男なのだろう。こいつが、こい  
つが、こいつがいなければ。お嬢様がこの学校に通っていることは  
なくなる。さあ、どうしてくれよう。寝ているし、都合は良い。襲

うか！襲っしかない！！」

身の危険を感じ、横にごろっと一回転。

「とうっ」

先程までいた場所に謎の長髪男がダイブした。

「うわあ、危なかった。後少して貞操の危機だったよあ」

「ちやうわ！そんな趣味は持ってない！！殺そうとしたただだ」

「殺してから襲っちゃう系？」

「違っつての！ホモじゃないから、正常だから！」

自分を正常と言うテレット（ロリコン）。

「何しに来たの？」

「おまっえをあんさっあしにきた」

噛みまくりである。

「え？何語？」

「うっさい！覚えておけ、次は生かしておかない」

そんな置き台詞を吐き、窓からトウツと飛んでいった。

「何なの？ヒーローにでも憧れてんの？」

そんな風に見えてしまった。

まあ、再び寝ていたわけだけど、騒がしく起きてしまった。

「ちよつと、何様のつもりよ！」

「何様でもありません。私はお世話をしに来たんです！」

「それは私の仕事よ！」

「いいえ、私です」

「私」

「私です」

睨みある両者。

「じゃあ、私がやる」

もぞもぞとベッドの中に入ってくるユーク。

二人とも驚いていた。

「何、してんの？」

「暖めてるの」

抱きついてくる。女の子の柔らかさが感じられた。

「ちよつと」

「え、ええ？誰ですか？」

困惑する奈美、双葉さん。

「私はユーク。夜季の許嫁」

当たり前だと言わんばかりに堂々と嘘を吐く。

「い、いつのまに」

奈美。

「ええ！許嫁・・・」

絶句する双葉さん。

「ああ、もう」

頭をがしがしと掻く。いい加減、説明するのも面倒だった。

ユークの冗談だと分かったはずなのだが、まだ警戒している二人。

「ねえ、何なのこれ」

二人が両サイドから腕に絡んでくる。ユークは肩車。

「女の子をハベラかす男の図」

ユークが頭上で言ってくる。

「違うよね。虐めだよね」

「何よ！貧相な体で悪かったわね」

何故か、奈美にキレられた。

「ぷぷつ、可哀相な人。でも、私はあなたほどじゃないので大丈夫ですね」

「うつさい！私と変わらないくせに！」

「違います。天上さんよりは大きいです」

「微々たるものじゃない！！」

「それでも、勝利しているのは私です」

「むむ」

「むむむ」

両サイドでにらみ合う。

「はあ、どっちでもいいから。離してくれ、てか開放して!!」  
いい加減、うざかった。

「むぎゃあああああ」

体を思い切り振り、全員を引き剥がす。

「はあ、こっちのほうで楽だわ」

重さがなくなり、軽くなった。

「いったあ、何すんのよ!」

「痛いです」

「夜季は私の太ももの魔力に負けた」

それぞれが言いたいことを言ってきた。

「ないから、邪魔だから」

それだけ言っておく。

その後、奈美から苦情を言われるが聞く耳持たず、ふらふらと寮に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4592j/>

---

やる気ない魔法科生徒

2010年10月17日19時52分発行